

## 秀賞

### ししおど 鹿踊りを世界に広める

岩手県奥州市立江刺第一中学校

1年 菅野 舞衣

百体に近い、鹿が二手に分かれて踊り狂っている。大きくカッシャを振り、ササラも右に左に揺れている。激しい踊りにもかかわらず、たくさんの鹿たちの一糸乱れぬ動きに私は、瞳が釘付けとなりました。

私は地元の伝統芸能である「鹿踊り」に取り組んでいます。鹿踊りは奥州市に伝わる伝統芸能であり、複数の団体が存在しています。その中でも私は、「行山流角懸鹿踊（ぎょうざんりゅうつのかけししおどり）」という団体に所属しています。古くは、明治時代にルーツがあり、令和の現代まで多くの先人たちが引き継いできた伝統ある踊りです。

そんな鹿踊りに私が取り組もうと思ったきっかけは、元々角懸鹿踊に所属していた父母の影響です。幼い頃から私は両親の踊りを観に行っていました。特に印象に残っているのは百体近い鹿が激しく踊る「百鹿」です。たくさんの人たちの動きがピタッと合うのを前から見たときの感動は、一言で言い表すことができるものではありません。

また、両親の美しく、迫力がある踊りは私にとって憧れです。父の踊りは中立ちらしい大きな素振りや、見る人を圧倒するような強く、激しい踊りです。母は側立ちですが、「四人狂い」の時は特に、他の人たちからも際立つような迫力ある動きをしています。鹿踊りの装束は、袴などの衣装、ササラという飾りのついた頭につけるカッシャ、演奏しながら踊るための太鼓を入れて、約15キロもあります。これを身につけて踊るのは想像以上に難しいです。しかし、両親は本当に装束をつけているのだろうかと思うくらい、大きく激しい動きを見せてくれます。その姿に私は感心し、私もそのように踊りたいと思っています。

私は太鼓をつけたばかりで、叩きながら踊ろうとすると、すぐに振りが分からなくなってしまいます。残念ながら私の踊りは、太鼓を叩きながら踊り、観る人を圧倒する両親の足元にも及ばないものです。

そんな私ですが、目標があります。今年はデビューして、多くのお祭りや公演に出るので、そこで皆が感動するような踊りを見せたい、これが私の目標です。

これまで出た公演で、まずデビューして初めてのお披露目は山の日にある「玉の夜市」でした。私が住んでいる地域で行うイベントなので、覚えた振りをし

っかりとできるように頑張りました。また、観客の人たちは、いつも私のことを見守ってくださっている地域の方々です。そんな人たちに私の鹿踊りを見て、感動していただきたいと思い、精いっぱい踊ってきました。

また、「百鹿大群舞」という公演がお盆の期間にあり、両親と姉・私で出演してきました。今回の一番前での中立ちは父が務めたので、自然と私たちも踊りに気合いが入りました。一番前での中立ちは、多くの鹿たちの中で一番目立つ役職で、今回を逃すと、もう次回は機会が回ってこないかもしれないものです。直前の練習から装束を身につけ、その重さに負けないように、振りを間違えないように、リズムと動きを覚えました。そして当日は、なんとか振りを間違えず踊り切ることができました。公演が始まる前は緊張が高まり、踊りやリズムが飛んでしまいそうでしたが、練習のかいもあり、踊りきることができました。練習の成果が出たことと、終わった解放感でこの時はとても楽しく、思い出に残るものとなりました。

しかし、公演が終わった後に自分の踊りをビデオで見て、私は驚きました。自分自身、踊りはまだまだだと思っていますが、想像以上に振りは小さく、見る人を感動させられるものにはなっていなかったのです。振りの順番は間違っていないのですが、それだけで、迫力もなければ、目を引くものには全くなっていません。振りが大きく圧倒的な父の踊りや、他とは異なり目を引く母の踊りのようにするには、振りを間違えないように練習するだけでは到達できないのだと痛感しました。

私の夢は鹿踊りを岩手県内、日本全国、そして世界へと広めていくことです。私が感動した、多くの鹿が太鼓に合わせて一糸乱れぬ動きをしたあの素晴らしさは、地域や言葉、文化を超えて伝わると思うからです。そのために自分の踊りを見て感動する人を増やし、鹿踊りの良さを言葉で伝えていきたいです。今の私の踊りではその目標をかなえることは難しいですが、諦めるつもりもありません。次は花巻まつりでの公演です。母が前立ちで、私が側鹿を務めます。一番前で激しく踊る母のように、私も振りを大きく、見てくださるお客さんに鹿踊りの良さが伝わるように心を込めて踊ります。

「振りは大きく、観る人にも最高の公演にしよう。」これを胸に踊ってこようと思います。